地域おこし協力隊

活動テーマ
塩原温泉街の活性化

大野（おおの） 貴広（たかひろ） さん

塩原温泉街で活動する大野貴広さん。大野さんが手掛けてきた温泉街での活動を紹介します。大野さんから見る塩原温泉街とは？

観光系の仕事に携わりたい

塩原温泉街の活性化のために、平成30年11月に着任。実家は千葉県御宿（おんじゅく）町という海沿いのまちで旅館を営んでいます。観光業に興味があり、就職活動中にインターネットで本市の協力隊の募集情報を見つけ、応募しました。実は塩原温泉には、小さいころ家族でスキー旅行に来ていたと、協力隊に決まってから親に聞いて知りました。

塩原の良さは人の良さ

活動していく中で気が付いたことは、「塩原の人が塩原の良さをあまり知らない」ということ。そこで、ホテルや旅館のおかみやフロントで接客する従業員に「塩原を知ってもらう」ため開催したのが「塩原DCCプロジェクト※」。塩原温泉旅館組合が主催となり、塩原温泉の名所・名物を見て食べて回るツアーを企画しました。塩原温泉に泊まったお客さんに、帰る前に一つでも塩原を勧められるようになってほしいという思いから始め、延べ150人以上参加してくれました。塩原の人は、面倒見がいいんです。昔からの観光地のせいか、排他的な感じは無く、よそ者に対して「どれどれ」と近寄ってきてくれる人懐っこさがあります。塩原はそういう人脈を大切にして、事業を続けていくことが大切だと思います。残りの任期は塩原の今後を考えて、持続可能な活動をしていきたいですね。

※DCC･･･D＝ディスカバー（発見）、C＝コミュニケーション（意思疎通）、C＝コネクト（つながる）のアルファベットの頭文字

塩原温泉は飲泉できるところも豊富。

気になる！ 旅館ホテルの新入社員研修って

大野さんが始めたこの研修は、旅館のおかみから「新入社員同士をつなげて仲間にできないか」と相談されたのがきっかけでした。「せっかく入社しても、同じ旅館の従業員同士では休みが合わず一緒に遊べない。やりがいがなくなってしまい、離職することも」と話す大野さん。「休みの日に一緒に遊んだり、私生活を充実させたりしたい」と考え、仲間作りの機会となるよう開催したそうです。今では観光協会の地元若手職員や塩原の若者を中心に“ワカモノの会”として自主的に活動しています。今、塩原温泉は若者を中心にアツく盛り上がっています。

地域おこし協力隊

活動テーマ
生乳･チーズを生かした地域活性化

遠藤（えんどう） 圭一（けいいち） さん

着任して１年が経過した遠藤圭一さん。生乳生産本州一の本市で生乳・チーズを生かして、地域の活性化のために活動しています。遠藤さんの乳製品にかける思いとは？

きっかけは移住ツアー

出身は福島県三春（みはる）町。東京の学校へ進学した後、都内で医療事務の仕事をしていました。平成30年9月に市の移住体験ツアーに参加し、本市に初めて足を運びました。その時に見学した旧青木家那須別邸に魅了され、一瞬にして心を奪われたことと、都内にも出やすい立地ということもあり、ツアー後に協力隊へ即応募しました。移住しやすい地だと考えて、勢いで飛び込みました。

生の声をやりがいに

現在、チーズフォンデュのご当地グルメ化と市オリジナルチーズのブランド化の2本柱で活動。そのほか那須拓陽高校の生徒が作るオリジナル乳酸菌飲料「拓陽キスミル」のPR活動にも参加しています。

昨年9月1日の牛乳の日イベントで、チーズフォンデュを初めてお披露目しました。チーズは市内のチーズ工房の協力を得て提供しています。付け合わせの具材も市内産を使用するので、まさにメイドイン那須塩原です。イベントでは、お客さんの反応がダイレクトで聞けるのでやりがいを感じます。プレッシャーはあるけれど、できる限りご当地グルメとして定着できるよう働きかけをしたいですね。

チーズを熟成させるための密閉作業。

気になる！ 農業や市のおすすめスポットを動画で配信予定

本市は酪農のほかに野菜などの農業も盛んで、イチゴやトマト、高原の冷涼な気候を生かしたカブやダイコンも特産品です。「豊かな自然をはじめとして四季ごとに味わえる農産物もあり、現在市内の農園を借りて自ら野菜を栽培しています。これらの魅力を県内外に発信できる動画を作成し、移住希望者や、協力隊希望者に市の魅力を伝えていきたい」と、遠藤さんの顔は期待に満ち溢れています。

市オリジナルチーズの試作品。本市・県・小山高専・那須ナチュラルチーズ研究会が共同で進めている。